

石川県教育委員会賞

変わらないもの

津幡町立津幡南中学校三年

綿谷美空

「おばば、きたよ。」母の実家に帰ると、大好きな曾祖母に一番にあいさつをする。愛情と尊敬を込めて私は曾祖母の事を「おばば」と呼ぶ。「ゆきちゃん、来たか。」曾祖母は必ず私と母のいとこの名前を間違えて呼ぶ。でも私はそれを否定せず、話を合わせる。

曾祖母は現在 94 歳、昨年冬頃より認知症を発症し、ここ半年でずい分症状が悪化したという。子供が大好きで、優しく、特に私はかわいがってもらった。そんな曾祖母が時々人が変わった様に怒ったり、同じ話を何度もくり返したり、最近は排泄がうまくいかず、家中が激しい臭いにつつまれる事がある。その臭いに私は何度となく吐き気におそわれた。しかし、祖母や母、父は平気な顔をして、曾祖母の何度もくり返される同じ話に、初めて聞く様な顔で返事をしている。曾祖母の心の平安が認知症の悪化を予防する事を知っているからだという。すごいと思った。そしてこの人達にこんなに愛されている曾祖母は私が知る以上に素敵な人だったのだと確信した。

ある日私はある電話を立ち聞きした。もう少し状態が悪くなったら、曾祖母を施設に預かってもらう事も考える様母が祖母に話をしていた。私は信じられなかった。私の中では年配者を施設に預けるという事はもう世の中や、家族から見離されていく事だと認識していたからだ。テレビのニュースでも時々施設での虐待の話が流れている。「おばばをそんな所に預けるなんて許せない。」と怒って母に抗議をした。すると私の思いを母がじっくりと聞いてくれ、こう話してくれた。母は現在看護師として老人福祉施設に勤務している。色々な家庭環境、その人の生き方考え方の違いで様々な老後の形がある。家族に見守られ暮らす事が理想なのかもしれないが、時代の変化と共にそうならない時もある。けれどたとえ他人であっても、その人の事を理解して、心を通じあわせ寄りそってくれる人がいればその人は決して不幸だとは思わない。その為の施設であり、そこで働く人達は寄りそえる人になりたいと日々努力を重ねている。自分もその一人であると。それからもう一つ、介護する家族の方にも人生があり、どんなに良くしてあげたいと思っても経済的、肉体的、精神的に限界があれば、両方共倒れてしまう事がある。それを予防する事も施設の一つの役割でもある。確かに、たまに帰って曾祖母の相手をする私は、それほど辛くないが、毎日面倒をみている祖母は大変だろう。母にとって曾祖母も祖母も大切な家族であり、もし両方が共に倒れる事があれば一番悲しいのは母であろう。だから母は祖母に助言をしたのだ。母の思いも解からず強い口調で抗議をした自分が恥かしい。

電話を切った後、母の目に涙があふれていた事を思い出し理由を聞いてみた。それは、祖母が曾祖母に対する思いを母に話してくれたからだ。十四年前、曾祖父が交通事故で亡くなった。その事故は祖母が曾祖父を車で病院に連れて行く途中の出来事であった。祖母には傷一つなく、助手席にいた曾祖父だけが帰らぬ人となったという。その数年前、自分の息子、(私の母の父)も交通事故で亡くしていた曾祖母であったが、警察でこう言ったという「うちの母ちゃん(祖母)は、若いのに父ちゃん亡くしてそれでも私らの所においてくれた。おらの娘と同じや、おじじ(曾祖父)が死んだのは母ちゃんのせいじゃない、母ちゃんは大事な人や。」と。この時祖母は自分の実の母以上に曾祖母を大切にしようと思ったという。だから、病によって曾祖母がどんな姿に変わっても、となりで寄りそっていきたくて電話で話していたという。私もその話を聞いてあついものが込みあげてきた。そして改めて曾祖母とそれを見守る祖母の事を尊敬した。

現在の日本は急速に高齢化が進んでいる。それと共に介護に対する問題は切り離すことはできない。まだまだ環境も整わず、介護する側される側両方が苦しむ事もあるのが現実であるという。では私は何をしてあげれば良いのだろう。答えはまだみつからない。

今度曾祖母に会いに行く時も私は「ゆきちゃん」になる。でも今度とはことん「ゆきちゃん」でいよう。そして曾祖母が安心できるひとときをつくってあげよう。それから祖母にはこう言おう。「いつもおばばを大切にしてくれてありがとう。」これが母の言っている「その人の事を理解して寄りそってあげる」という私なりの行動だから。